

【原著】

フリダヤ繰り込み

吉 田 裕 午

Renormalization of Hridaya

Yugo Yosida

キーワード：裂け目，貫線撰持，フリダヤ，次元，Scaffold，識智，思考の正四面体，止揚，繰り込み，意味の幾何学化，メタファ，協働，AR，遍在，横超，動的幾何，創発，妙観察，成所作，平等性，インタフェース，インセンティブ，カタルシス，オートポイエーシス，両眼視，大円鏡，法界体性，懸垂線，眼横鼻直，多次元マトリックス，還相，是故空中，動的平衡

1. は じ め に

「一鏃破三関」という白隠禅師の墨跡がある。この三関の解釈を広げると、ヒトの前に立ち
はだかる3つの障壁に思い当たる。たとえば、「知の裂け目」「行為の裂け目」「存在の裂け目」
のように称されるそれらである。白隠という号すら一鏃の隠喩であると後に気づくが、本論文
では、意味空間のパロールのル・プリ裂け目（溝，ズレ，軋み，襷，崖，断層，河，ブラン
チカットなどともよく換喩される）を俯瞰し，問題特異点の解消の要を貫く鏃，つまり人生旅の
歩き方（あるいは困難の克服法）を探る。

ところで，よく念誦されている般若心経において，貫線撰持とも訳されたフリダヤストラム
は，言い得て妙である。フリダヤ心は，どんな時も「中V」「仮A」「空N」を具現する中央
に位置し，次元の上昇に耐えて，衆生を見守り包み込んでいる姿に慄然とする。ここで，VA
Nの略号は，いわゆるコト・ココロ・モノという捉え方の3つの側面や領域の記述に用いる。
内容的に，動詞・形容詞・名詞がよく対応している。後に，それらの台（うてな）として，
Scaffold（略号S）を提案する。それは背景や地として，景色や塵などと称される一方，ムや
云を付せられ存在を曖昧模糊にされたりもしている。置き去りにされた身体，梁塵秘抄，和光
同塵，真の名，集合無意識，ダークエナジーなどとの関連性も容易に推測される。脳対応では，
旧皮質，脳幹や小脳，延髄，さらには，第2の脳，第3の脳も想起される。

見えるNやその運動V（モノ・コト）の記述は，地と図およびその境界となる輪郭に注意し
ながら対象を識別し，狩猟や採集活動を通して個数などの示量概念を形成する。また，Nの分
配意識は，濃淡，～しやすさ（～しにくさ）のような示強変数など徐々に抽象化された概念を
産み出し，見えないNにも拡張され，言葉Nという言語の巨大意味空間を創出した。科学を辿
ればロゴス論理を発展させ，「法」「光」「明知」による理解充足感を時代の雰囲気に招来した。
このような操作しやすい道具的な過程発想は，パトス意思V領域を科学技術社会の循環の中に
独立させる一方，未来予測の不確定さとともに，パンドラの箱などの言い伝えにあるような，
言説陶醉や，誘惑や幻覚に迷い，時として憎しみ惑い，悩み，悲惨な結果に痛みを伴っている。
本論文で採用した意味空間モデルは，元来のVやAを立体化し，Sを取り戻した生き方（道）

に主眼がある。Sの復活は、痛みを乗り越えた、ヒトとしてのエトス尊厳品格ある生き方に再帰するが、立体化された自己Nは、人間観、価値観の再構築を必要とする。後に図示するように、社会的自己Nそのものは、面前のVASの投影に過ぎない。置き去りにされがちな自己は、震えながら、イノチの交流を待ち望んでいる。

脳や遺伝子研究がさかんである。やがて、このような意味空間モデルは、ヒトの進化と右脳・左脳・脳梁・海馬・扁桃体・側坐核・松果体などのノードや橋との対応も明らかになり、形態やホルモン生理の知見とも関連していくだろうが、ここでは、**識智の進化・次元の上昇**を多重描画してみる。既に、唯識・密教等において論じられている内容も多いが、思考の分類・統合を再度整理し把握する意義は大きく、至る所その用語を借りているが、換骨奪胎ではない、共通言語としての意味空間モデルを目指す。過去の論文で、思考の正三角形の進化形として、**思考の正四面体**、さらにその止揚として、思考の正五胞体を構想した。スコープ表現は二次元に射影されるので、必然的に折り畳みや**繰り込み**を生じ、領域間の多重の意味は両眼視によって接続制御できる。また、名辞的な集合論的記述Nのみでは、つながりのある島とよばれるトポロジーや動きV、さらには感動A、エントレインSの諸々を正確には記述できないので、**意味の幾何学化**は秘鍵となる。

コンテクスト文脈という流れVに注目した捉え方がある。意味空間でも、向きをもった流れのベクトル概念に着目するのも有意義である。ここでは、さらにそれを俯瞰し、全体の**状況**や**状態A**という把握をする。幾何学的には、点的な領域、線的な領域、面的な領域を意識し、意味的に、名詞・動詞・形容詞的な表現との対応を考察する。動きの**メタファ**で表現すると、固体の伝導拡散イメージ、液体の流体イメージ、気体の波動イメージが優勢だが、接続境界においては、発生・消滅の極や分岐線、粘菌ネットワークのような**協働連携**イメージもメタモルフオーゼつなぎとして有用である。

ここで、意味空間モデルの基礎に、スタンドアロンの情報処理システムをおく。手前に個としての本体、右に入力、左に出力をおくと、底辺の右から左へのラインは、制御・演算の内部処理に相当する。思考の正三角形の頂点を、象徴化された外部対象とおく。必要な図は地の中から適時ピックアップされる。アフォーダンスや武器の進展とともに、手足の幅であった自己の影響領域は拡大されていく。人々の記憶は古来より、その場の口承や見本によって引き継がれてきたが、道具や文字の発明は状況を一変させたといわれる。この地平の拡大、次元の上昇を、モノ対象とコト目的の分離の視点で捉えてみるのも有用である。身土不二の自然環境循環サイクル源Sを模倣して、文字によるコトの記録活用という新たな人間社会循環サイクルVを描くことができる。代表格の要素還元自然淘汰の拡大解釈は、今なお根強く社会構造に反映されている。人工の次元に立ち上がったVは、最近のいい方では、**AR**（オーギュメンティッドリアリティ；強化現実）が近いニュアンスであり、迷惑に人工の香りが充満している一方、その俯瞰と補給コントロールには慣れを必要としている。拡張された感覚である力覚には、加速度が関与している。

「知の裂け目」を言語活動やリテラシー（識字）公教育によって渡ることの意義はいうまでもない。ただし、知識、データは大切であるが、見かけやフィルタの違いによって、現象の受信・表現・判断が影響され、それが嘘、似非、錯視、洗脳、陶酔に深く関わり、思考の自由を反って奪い迷わせている状況には注意がいる。戯論打破のメタファを「剣」に例えることもあるが、対戦修業により、その使い方、真偽の見極めが智慧となる。

同時に、正義が選択肢や状況で変わることにも判断行動を惑わせる原因がある。意と情の絡み糸とも例えられる「行為の裂け目」も、ヒトの社会活動の進化に付随する。善と悪の判定は、

利益を受ける側の差に伴う出来事も多い。柔軟性をもった判断適用基準が必要である。

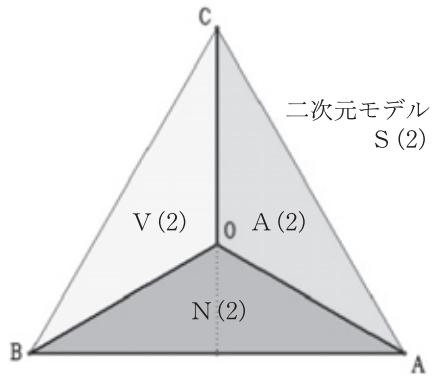
失望による無への接近は、さらにヒトを「存在の裂け目」に誘う。ヒトは、ヴィクトール・フランクルの「夜と霧」のような絶望的な状況の中でも、時を越えたスコープによって希望を見つけることができる。概念や哲学を越えた、言葉も越えた直観的な認識を探りながら、信じる密蔵が痛みを共に生きる感動となる。愛や美の本居への旅は、フリダヤへの帰命と似ている。聖なる道やタオ道なども、先人が気づいた導き「鈴」の音色の響きをしているのであろう。覚悟しよく生きる意味でも、「教」はまさに修道である。

Post Secretという自分の秘密をネット上で吐露して、トラウマを克服し平安を取り戻す信頼依拠のプロジェクトがある。ジョークやユーモアも似ている。ユビキタス時代の究極の智は、遍在や共愉感覚を持っている。時の次元への飛翔の充填指標は、自在な思考の正四面体の中の横超正信であると直観できる。

数理的な応用として、懸垂線三昧をあげる。ありふれた曲線でありながら、その自己相似性には驚嘆すべき「美」を秘めている。動的幾何ソフトによって、4つの点（2つの端点と地平線と平行な接線）からなる風景を記述してみる。首の飾りも、ターザンのロープも、そのカタチの中に、懐かしい地球重力の記憶を留めている。動的幾何は、見えない操り糸や調整マンダラに気づかせる。また、パラメータの自在化は、次元の上昇発想を促進し、創発や進化モデルとのつながりも深い。ヒントを与える先人の警句・逸話を意味空間に配置すると、心の糧を得て、探究を徳に活かす道が拓けてくる。

2. 繰り込みの起源

進化の捉え方、とりわけ自他区別（人称）や知の段階発生（識）の説明にも意味空間モデルは有効である。まず、二次元（ハ虫類）モデルで個を線分A Bとして手前に配置する。入力側をA, 出力側をBとする。父母性発達は、対象Cを図として地A Bから分離して立ち上げることに相当する。同時に、触手や運動器官の発達も並行する。脳の発達は、転識得智と対応し、止揚された識（意識）によって、個の領域はまず、記憶により対象C側に引き上げられる。逆に表現すると、底辺にあたる個の拡張は、外界の模様を射影的に繰り込んで進行する。この構造は、三次元（ホ乳類、ヒト）モデルにおいて、正面から捉えた自己領域への映り込みに対応するが、かつての天然の、N(2)、S(2)を置き去りにしている点に注意がいる。台S(3)に組み込まれた記憶が一時的に忘却され、眼前のパノラマに、主体はV(3)やA(3)であるとの夢を追い続けている。



図のように、個の拡張と対象を結ぶ線COによって、感覚と運動が意味的な分離をし、N(2)の側にも、二つの関（境界）が生まれる。循環のサイクルに着目すると、線分A Bの消化過程と、外界の射影として、個の内部におけるA B Oの循環があり、モノと情報の流れが連動したしなやかさが個の性能を決定している。ミトコンドリアや葉緑体の動力応援も励みになったであろう。左辺の運動空間V(2)においても、同様の対象からのフィードバックがある。たとえば、反射という機制がある。不随意的に、あるいは擬人的に、運動を自分の意思を代行するホ

ムンクス小人繰り込みの作用歯車として分離できる。線分OBは、外界からの抵抗あるいは、加油にあたる。線分COは、まさに外界の運動への応答であり、「妙観察」の智とは、それへの「気づき」が出发点となる。

同様に感覚器の循環をホムンクス繰り込みの仕業とみなすと、それはどんな歯車であろうか。個の存在が、行為によってではなく存在を通して、外界と交流している。この感覚は、「ひとりを全体に」捉える感覚と重なる。私のこだまが外界と共鳴している感触である。たとえば、ハ虫類の日光浴の風景や下天の舞いは、まさにこの一体感覚なのであろう。芸術領域の小人たちは、この繰り込み方を母体とし、言霊や木霊も幸っているようである。「成所作」という高次の智は、このような謙虚で優雅な雰囲気を醸えている。焔で仏で、時には鬼も加えて、ムや云の人生アートとして、秘密のサンクチュアリ解放園に秘密の妙を遊んでいる。子どもの無邪気さでありのままに平凡に生きる尊さは、痛みの果てに蘇る場合が多い。

父親不在、父親殺しの時代に、感情を再認識する隘路がある。アニメ「ゲド戦記」において、主人公アレンの影は、「不安をくらって 闇が大きくなり 闇と共にあるべきもの その光が 体を求めて彷徨う影になってしまった」と語る。蜘蛛の糸のようなそれは、台の蓮華坐に渉入する「平等性」とよばれる智に連なっている。

3. 繰り込みの発展

道具や文字の発明は、ヒトを一気に人工の森に迷い込ませた。行為の森やぬばたまの柱には、野獣や妖怪が出没している。二つの関の拡大継続と合わせ、対象と自分をつなぐラインは、知恵のリンゴを食べた報いの「行為の裂け目」として、大きく立ちはだかり始める。対象が人工の次元に立ち上がり、目的を求め彷徨う、社会システムという構造体に埋め込まれたからである。社会的自己Nの確立を目指し、脳内の情報認識は次元上昇に伴う構造変革を遂げながら、教育活動においても自分が社会的存在であることを常時要請されている。

皮膚という個と外界あるいは対象との境は、インタフェースという概念に拡張される。高次の運動、感覚あるいは、入出力のほかに、目的からのフィードバック確認が必要となった。忽ちはインセンティブがこれに相当するだろう。脳内では、ホルモンがコントロール性を増している。運動ラインを止揚した社会面の循環は、政治経済活動、教育福祉などに体系化される。

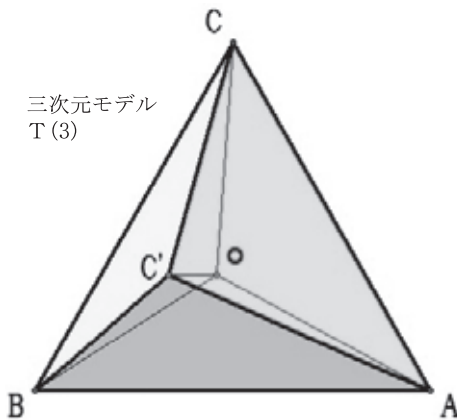
他方、感覚ラインの止揚はイベントやモニュメントの記憶に増幅されているかのようである。人工を仮想とよんでしまえば、「仮」の捉え方も斬新になるが、それは現実と無関係という

意味では決してない。A領域の研ぎ澄まされた感覚こそが、カタルシスに至る道である。アポトーシスやそれにつづくオートポエシスは、密かに命の詩を歌っている。

繰り込みの観点では、対象と目的を同一視すると、ハ虫類の脳とヒトの脳が、相同の刺激反応をしている。正面からみたスコープは重なり合ってみえる一方、底面の影Sは薄れ、眼前の眩光Nが幻惑を生じさせている。

ここで、フリダヤ心を広げる意味空間の外科手術を試みる。肝は、中心を少しずらす両眼視で遠近感をつけることである。さらにずらしてみる

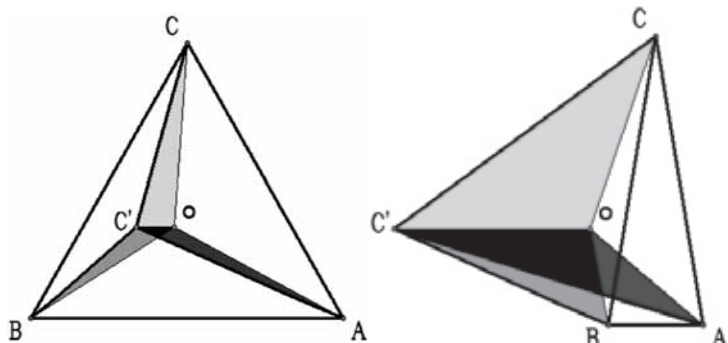
三次元モデル
T(3)



と、旧来の対象と目的との差異のからくりが見えてくる。

対象代理の母C'は旧来の位置に君臨しつつ、目標とすべき父Oは霞んで隠れたかのようである。「白隠」メタファが見事に言い得ているが、父親殺しや父の不在の始まりは、ホ乳類の母性の発揮、情の起源と同じくするだろう。得と徳が分離し、元来の対象C'は置き去りにされ、ひたすら与える位置に止まってみえる。感覚を引き出すべき対象が、与えすぎによる甘え依存過保護過干渉を導いている。線分C'Cは、居所の形成をメタファする。一方、隠れた父性の発見はフリダヤ心Oへの回帰に準えられる。Oへの意識の集中はまさに「戒定慧」に対応し、三方向からフリダヤ心Oに迫ることができる。

この喩えによれば、前述の三関の由来は父母性の分離に付随する。本来の対象へのアプローチの仕方は、父母性の重なりによって、BCあるいはCAがらみの様相ドラマを複雑に魅せる。行動の揺らぎ（葛藤）は、COC'という「行為の裂け目」の由来となる。他方、感覚の襲は、AOC'という「存在の裂け目」に関連する。まさに、行動は智慧の、感情は存在のせめぎ合いであり、識のレベルが大きく様相に関係している。同様な次元把握を「知の裂け目」に適用すると、知識の活用の両刃が見えてくる。包丁で決してヒトを殺めないプログラム（智）を教えることができれば、道を修めたことになるであろう。まさに、創造と破壊は紙一重なのだ。村上春樹1Q84風の、空気蛹、2つの月のメタファとの関連も面白い。阿Qは、まだ世界中にいっぱいいる。脱皮変身のメタファを渴望した芸術家、詩人たちにグリュウ気分を捧げたい。



「行為の裂け目」を渡り、「存在の裂け目」を往来する手立ては、対象の俯瞰、どんでん返しにありそうである。金胎不二、BとC'、AとOを重ねると、慈悲喜捨の曼荼羅融合世界が出現する。正義の記述、判断・選択の基準に、このよう

な視点の自在変更は有効である。神話の記述は、多分にCを意識している。この角度でみると、既に対象は天に移動を果たし、語り部や聴衆は高千穂の地平線C'Oに勢揃いしている雰囲気である。

また、彼方のC'より等方的に放射を続ける智を「大円鏡」と隠喩し、時に月輪と換喩することにも合致する。自己ABCの中央延長にフリダヤOを仮に捉えることができ、それは「法界体性」の智ともよばれるが、さらに時間Tを繰り込んだ次元にフリダヤOは、旅立つ。各種曼荼羅は、よくフリダヤOのまわりの人生色模様やカタチに対応する。次の節で、要である一鏃に相当する風流を数理的に三昧する。

4. 懸垂線三昧

懸垂線は、張られた注連縄の織りなす見慣れた風景である。アートとして、その写実にはどのような気配りがされてきたらうか。数理的には、懸垂線は双曲線関数で捉えられる。そのパラメータの取り方にはいくつか候補があるが、作図的に端点と地平線と平行な最下点を通る直線が馴染みやすい。河を横切る吊り橋の紐心情とも共鳴する。

似た曲線である放物線と対比して、その数理的な構成を吟味する。なお、使用したソフトは、動的幾何を実現したKey Curriculum社のGeometer's Sketchpad（略してGSP）である。

懸垂線 $y = a(\cosh(x/a) - 1)$

最下点を原点とする。

自己相似性に注目（規格化）し、

二次方程式から $z = \exp(x)$ を導出して、

$$|x_1| : x_2 = \ln(z_1) : \ln(z_2)$$

の内分より、原点決定

2分法で左右を補間、曲線を再構成

放物線 $y = ax^2$

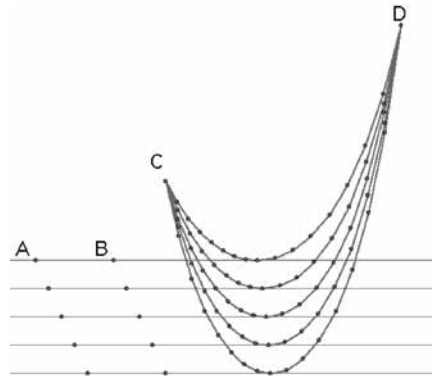
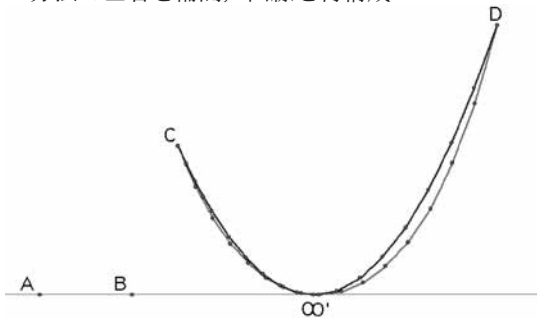
$$y_1 = ax_1^2, y_2 = ax_2^2$$

最下点を原点とする。

$$|x_1| : x_2 = \sqrt{y_1} : \sqrt{y_2}$$

の内分より、原点決定

2分法で左右を補間

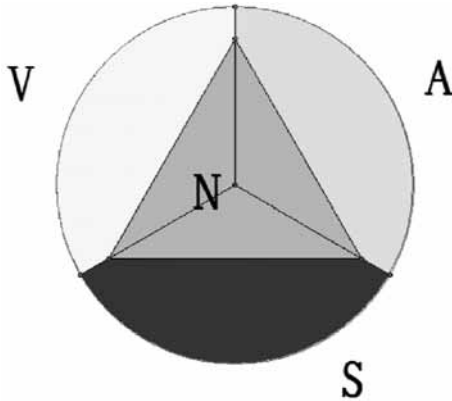


上左図は、懸垂線と放物線を、端点と最下点を通る直線をパラメータとして一致させ、比較したものである。ほぼ最下点が一致し、放物線がわずかに懸垂線の上にくる。懸垂線には自己相似性由来のセレンティ落ち着きを感じる。A領域は、想や情と関連深い。未来を描く能力は、「能」の語源かもしれない。デジャブ既視感は、本質パラメータを獲得した識智の賛歌かもしれない。舞台背景や絵画に懸垂線は頻出するが、CGにおいても、もっとオブジェクト化されて活用されることが望まれる。上右図は、最下線を等間隔にとった習作である。自在に夢のようにイメージを膨らませることのできる動的幾何ソフトは、まさに智の乗り物と称されてよく、フラクタル模様などとともに、アート領域に“*As you may think!*”の世界を垣間見せてくれる。なお、裏にはそれを支える多くの補助線が操り人形の糸のように連動している。それが、モノでなく波動のようにココロに響く。なお、最下線が端点の間に来ないときは単純な補間になるが、地平線が隠れたパラメータになっている。ここまで母なる地球の重力感覚が生命に刷り込まれているのは、大いなる感動、ボローン宇宙音である。

5. 四曼荼羅の臨界点・裂け目

相図の観点で、思考の正四面体における四曼荼羅の境界面とそれらが集積する臨界点を捉える。そこで、問題点を把握して解決策を探るために、先人の言葉と重ねてみる。例えば、遅しい実践力のある（環境と調和した）ヒト、という表現は、命や心を取り込んだ四曼荼羅をよく捉えている。遅しい（三昧曼荼羅A）、実践力のある（法曼荼羅V）、環境と調和した（羯磨曼荼羅S）、ヒト（大曼荼羅N）というパノラマ風景が展開し、フリダヤ心を包み込んでいる。対象が目的に次元上昇するとともに、昔の手の届く範囲にあり確かと思った自分Sが、社会的自己（役割）を含む、焦点がズレがちな半透明な存在Nに置き換わっている。にもかかわらず、

フリダヤ繰り込み



視野の中央にはいつもフリダヤ心はあって、名前においては「空」の様子においては「仮」の、動きにおいては「中」の、気分を滾々と醸し出している。特に、「わくわく、どきどき」の雰囲気はAに溢れ出し、「想」と「情」は電光石火のように駆け巡る。Vは「意」の、Nは「知」の形態の発現場にもなっている。

ヒトの新しい繰り込まれた属性を、個別性の超克あるいは人称、彼我の克服と捉え、共鳴する想いを時空に復活させ、「できる」範囲を宇宙に広げると、生まれてきた秘密が共有され始める。真

の名前S (3)は、自身のルーツを辿るキーになっている。言語で全領域を記述できるはずもないが、臨界点フリダヤ付近はとくに複雑に見えているはずである。

正面から見た思考の正四面体を膨らませると、「眼横鼻直」と道元が模した意味空間が現出する。両眼はVA、鼻はNに位置し、口足はSにあたっている。月と日の両眼図は、鼻の奥のフリダヤ心、父母のあるいは男女の理趣アニマ・アニムスを中央に秘めている。各器官を渡る船は、折り畳みや展開に長けた識智の羅針盤・GPSネットワークを有している。フリダヤ心は、どの器官からも等距離であるが、眼前のNによって隠されていることに留意する。類推のアブダクションを含むが、先人訓を頼りに、その錬成を試みる。

まず、必要に応じて展開される属性多次元マトリックスを整理する。

略号・器官	類似品詞；要	別名；特徴	情報関連用語	進化対象	例， 喩え， 類推
V左目	動詞的；中	コト：用横， 緯， 変化・指示， 流れ， 速さ， 作・運動， 力， 可能性（できる）	エージェント ミラー	機能， 意	顔， 耳， 文（目印） 手・皮膚（第2の脳）， 非*， 徳*， 鏡 直*（雨， 立） 善悪
A右目	形容詞的；仮	ココロ：相， 想 感覚， 品格， 情報， 所依性（られる） 隠喩， 雰囲気， 空気， 気配	クオリア ミーム	情， 名（概念）	光陰， 風， 味（評価）， 義 美醜
N鼻	名詞的；空	モノ：体， 身 縦， 経， 豎， 因， 量・強さ・潜在性 単語， 句， 文章， 結合， 換喩， 分類， 分析	オブジェクト	形・構造， 知	主*：形式知， 忍 自：息， 我， 法我， 田：果*， 思*， 理， 由 背後に父と母， 言*， 真* 真偽
S口	超人称(源N)	背景：基盤， 相即， 相応 梁塵， 灰， 粘土	エンタテインメント	地， 旧皮質	呪：暗黙知， 呪 腸（第3の脳， 畑）， 言*， 音*， 冗句*， サイ*（白川静）， 命*， 足* 聖邪
T：NAV Sの止揚	超人称(超N)	ダークマター， 集合的無意識， 融合， 涅槃	メディア アニメ アーカイブ	宇宙， 粒子， 場	思考の正四面体を新たな Scaffoldとして止揚（秘， 暗， 陰， 深， 密， 絶， 極， 超）， 無記

注*：

非：悲，扉，翡，緋，斐

徳：親，新，多様性（文化），瞳，憧，景

直（雨，立）：竜，電，雪，慧，筆，書，事**

主：柱（延髄，頸椎），中（中庸，折衷，妥協，折り合い）

果：（如，事，現，真）実，理，男，勇

思：脳（Mind），恵

音関連（字源からアブダクト）：

（カウ，意とおる）→亨（コウ；通じる），類：高・宰（司る，仕切る）・亭

（ハウ，意にる（器））→烹（ホウ），類：煮（にる）

（キョウ，意たてまつる・うける）→享（キョウ；祀る），類：饗（供する）・京・喬，
惇・淳（ジュン；あつい・すなお純）・醇・敦・熟

真：首，道，具

言：証，話，語，記，信，誠

音：意，憶，暗，諳，闇，韶，韻，響

冗句：言の葉，個と場（公），意の智（行い），事と言，クラウン道化，風刺，ユーモア

サイ関連（字源からアブダクト，畏敬）：

告，祝，加，吉，呪，占，古，固，咸，舎，害，沓，台 etc.

命：令，鈴，降，客

足：止，兄，正

事**：「手（人工）」現象・出来事；行為，関係，筋道，事実，事柄など。真＋事＞まこと誠

眼についての慧眼は，

「離見の見」（風姿花伝）

「君看双眼色 不語似無憂（君看よ双眼の色 語らざるは憂いなきに似たり）」（白隠）

「千峯雨霽露光冷（千峯雨はれて 露光すさまじ）」（大燈国師）

「みんなに，デクノボウと・・・そういう人に私はなりたい」（宮沢賢治）

「微笑」「咲顔」「和顔」（弥勒慈氏，布袋ほか）

「拈華微笑」「維摩一黙」（禪公案）

「大慈三昧は与樂をもって宗とし，因果を示すを誠となす」（秘鍵；拔苦与樂，科学技術）

「風葉に因縁を知る。輪廻幾年にか覚る」（秘鍵）

「天鼓の声を聴く」（能）

「女は人籟を聞くも，未だ地籟を聞かず，地籟を聞くも天籟を聞かざるかな」莊子（斉物論篇）

「虹の解体」（リチャード・ドーキンス；似非排除）

「曼儒般若は能く紛を解く。斯の甘露（法雨；教え）を灑（そそい）で迷者を霑（うるお）す。同く無明を断じて魔軍を破せん」（秘鍵；教育という鎌）

「心不在焉 視而不見 聴而不聞」（大学）

鼻の奥には「空」があり，

フリダヤ繰り返し込み

- 「禅智内供の鼻」(芥川龍之介)
- 「ピノキオの鼻」(コロッディ)
- 「離言の真如」(大乘起信論)
- 「父にありがとう, 母にさよなら」(エヴァンゲリオン, 碓シンジの科白)
- 「父ラング」と「母パロール」(言語: オノマトペ的「辞」～記号的「詞」)
- 「父シニフィアン」と「母シニフィエ」(概念: 憧れと反発の複合物・多義性; 象徴～想像)
- 「白」(九想詞の骨相, 浄土真宗の御文章, 白隠・白樂天)
- 「是故空中」(般若心経以降; 即菩提・即身成仏・これでいいのだ!)
- 「即身頓悟」(修験道)
- 「行行とし円寂に至る, 去去とし原初に入る。三界は客舎の如し。一心は是本居なり」(秘鍵)

口の上にはチャック具があり, 下には首がある。

- 「正しい儀礼とは死者と言葉を交わすことができると信じていることである」(内田樹)
- 「雪がとけるとどうなる?」「サンタクロースはいるか?」「ピノキオは人間になれるか?」
- 「我々はどこから来たか?」「我々とは何か?」「我々はどこへ行くのか?」(哲学入門)
- 「南泉斬猫」(禅公案)
- 「無の自覚による合一」(西田幾多郎)
- 「水波・金獅子・火宅の喩え」(法蓮華ほか)
- 「名もない一輪の花」(寺田寅彦; 遊蕩児)
- 「言語道断」(仏語)
- 「修道謂之教」(中庸)

問題の多くは, 地震の発生源のように, VAN領域の境界で起こっている。対処療法は反って状況を悪くすることもある。ここでは, 大局的観点から, その解決策(裂け目の渡り方)と分割の克服法を俯瞰する。要点は, 内と外, および, 父母性の把握と超克である。相図の領域で状態が異なるように, 思考の正四面体においても制御が異なる。教育は先人の智慧を伝えるが, 心を育てる力量は, 相対主義から脱したフリダヤ志向から生まれる。エトスの香りは, 大地SからイマジネーションA空間に漂う。自由でありながら秩序を保つ光ボゾンのような状況を社会に反映させることもきっと可能である。音の解読, 色カタチの秘密は, まだ理解途上なのであろう。妙観察, 妙徳として, 法身の説教をもっと真剣に視聴すべきである。

俗称	現象・発心ヒント	キー	解決策・智・菩薩
知の裂け目	迷い: アマラ・カマラ, リテラシ	定(禅, 三昧, 等持), 理, 因, 行徳, 金剛, 開示	諸行無常・妙観察・文殊
行為の裂け目	惑い: 戦争, 欲執着(苦), 二律背反(ジレンマ)	慧(選択・判断), 能所一体, 証, 清浄, 蓮華, 零	諸法無我・平等性・胎蔵・般若(覚母)
存在の裂け目	痛み: 自殺, 虚無	戒(念), 入, メメントモリ, 止観瑜伽	涅槃寂静・成所作・釈迦, 出世間
父母性の葛藤	精神病	理趣(本質), 和合	大円鏡, 無分別(ありのまま), 軽安, 無垢
(留意点)	一切皆苦(苦集滅道), 如是	自浄, 仁(慈悲), 調御(仏), 恕(得果), 果可分	不二, 度苦, 拔苦与楽, 信解 (印持, 忍)

父母性の和合は、空海やユングの指摘のように、社会的自己Nと人工VAとの調和をもたらす。裂け目を度外視すれば、本来のSとも心身のバランスは保っている。しかし、成長段階の乱れによって裂け目は拡大し、前記の表のような現象が生起する。究極の解決策は、想念にあるかもしれない。未来を「描く」能力を、**還相回向**に覽ることができる。アンチノミー二律背反の困難を、時の俯瞰・啓蒙で克服解消できる。

色・受・想・行・識とよばれた五蘊の光源も、フリダヤの屈折を経て、曼荼羅により趣きを増す。VANSのロンドの中心に常にフリダヤはあって、「心外」という状況は錯視や余所見によって生じる。VAの両眼視、特に、共にある象徴界Aでの滞在時間の確保が課題となる。ここは、「想」スクリーンや「情」の居所でもあり、時間旅行の出発駅でもある。「信」「托」の意識が、「美」「聖」への証入切符になっている。まさに、「わかる」に、「理解」「納得」「信解」の三段階があり、それぞれ、裂け目の渡り手形になっている。

似非の「科学」「正義」「共感」に要注意である。思考の正四面体を回転させるような、視点の変更訓練もひとつのアニメーションである。誰もがもつフラジャイルな側面をノーマライズし、台Sの上に展開されるイベントを見守る「第3の眼」を識する智が、思考の次元を上昇させる。

空海が秘鍵で示した「建絶相二一」と辿る問題発見乃至解決策への道は、あらゆる場合にあってはまって、その意味空間に射影される。手ぶらは、まさに心配事の消散と対応する。共時性や時間鏡は、記憶という繰り込み、循環のループに誘う。ここに至って、花と風は「能」演目のように、人生の友・世界の約束・永久切符となる。「自性清浄」の招来象徴世界は、光陰も能所も応報も主客を転じ、協働望気の閃きを演出する。

たとえば、囚人のジレンマを超える倫理、諸公案を明察するアピダルマがある。直線や平面思考から脱却することなしに、自在に識を向上させ知の地平を拓くことはできない。左右両手系の三本の指を伸ばし先端を合わせるだけで、ここで議論した正四面体立体曼荼羅が立ち上がる。科学が暴走しがちな時代に、大地のアニマを呼び起こせば、そのこだまが包括統合のフリダヤを魅せてくれる。識を転じて智を得る、このような自発的プロセスはぜひとも教育に取り入れたい内容である。インスパイアされる内容は、発想を越えて未来を創造する動力になる。イノチの故郷にたちかえり、優しい光に裏打ちされた悠久の時の感覚をプラスしてこそ、これからの統合する体の健全化がもたらされる。

6. お わ り に

生まれて来た秘密を、星の王子様のように体いっぱい感じる事ができたら、地球は砂漠すらなお荘厳な世界となるであろう。「慈」いっぱいの人には、只管敬意をもって接するのみだが、詩人のように逍遙三昧する日々もまた、好日である。現代は、神経を病む人が増えているという。「私の中の仏」「宇宙循環の流れ感覚」、「語らざれば」「見えざれば」「評価されざれば」ないという思考の狭量さ、強迫観念を越え、強い意思とレジリエンス柔軟性を学びながら、体の免疫も活性化してくる。幾多の災難を乗り越えてきた叡智を語り継ぐには、科学的リテラシーの剣を携え、共に愉しむ鈴の音色を愛でながら、見晴らしのいい景色を眺めていたいものである。

色(体)を「空」に止揚し、五蘊にこだわりを捨て**是故空中**を三昧すれば、地球という舟の乗り心地はまさに夢のようである。「行き急ぐこと勿れ。しかし、思い残すこと勿れ」を座右の銘にしたい気分がある。**動的平衡**、まさに、流れの中であって、不易流行を見失わない「智」

を身につけたいものである。言葉と声字、脳と空を自在に繰り込み、意識を越えるクオリア「識」を念頭に、人称超越を含めた神経ネットワークの進化を構想できる。複数のコドンの縮退に秘められた繰り込みは、来るべき生物多様性の準備となっている。脳内ホログラム表象のシナリオはホラーですら常時アドリブを受け入れるが、結末大団円は信じるほかはない。時系列の再編集は価値観のフィルタで装飾される一方、虚飾儀礼や巨大モニュメントづくり、サイコパス止まない殺戮シーンは、まさに現代の病い、不安の先取りになっている感がある。

慈悲は、人称を超越包括した存在を懸けた与楽抜苦の行。善悪、メリットデメリットは場合や状況による。複雑系のクオリアは、まさにこのような高次元の繰り込み構造をし、脳内でもダイナミック・コア基底核などその機能の候補であろう。ロボットがフリダヤ繰り込みした姿は、鉄腕アトムなどアニメでは、よく犠牲的死（殉死）の形態をしている。アニマ・アニムスの和解、六根清浄、カタルシス浄化、インパクト復活、さりげない花の露、等々、イノチはまさに意の智、フリダヤ繰り込みである。現象や表象を適度に味付けして折り畳まれた記憶の繰り込みは、このような可塑性パラメータをもった繰り込みとして、熟成過程を伴っている。

初めての道は不安を伴うが、先人のメモが確認の印となる。冒頭の「一鏃破三関」は、本学初等教育学科書写書道専修の金子志保里さんの書がきっかけとなった。書のもつ意味空間に表現気分を触発されたことをうれしく憶う。ルーツを辿れば、白隠禅師やさらにその先達関わっている。また、グローバルコミュニケーション学科の小西弘信教授には、数々のアイデアをいただいたことを深謝する。これも「私という現象」に響き合うコーリング天鼓の声に念えてくる。宿題忘れ、し残し気分も風流かもしれない。共に過ごしたメディア空間の記憶には、去りし笑顔とおくりびとたちが暫くの愉しみの余韻航跡を残し、さらなる時の次元への止揚を誘っている。

参 考 文 献

- 1) 空海著宮坂宥勝解釈：空海コレクションⅠ、Ⅱ、ちくま書房（2004）
- 2) 吉田裕午：紋様における繰り込み概念の形成と組織化、広島文教女子大学紀要27/、7-18（1992）
- 3) 吉田裕午：繰り込みによる直観的理解の意味、広島文教女子大学紀要28/、167-176（1993）
- 4) 吉田裕午：教育情報における繰り込み概念の意味、教育情報研究 9 / 1、23-32（1993）
- 5) 吉田裕午：教育情報における三角（参画）型繰り込み、広島文教女子大学紀要29/、213-223（1994）
- 6) 吉田裕午：動的幾何繰り込みと知の組織化、広島文教女子大学紀要30/、175-185（1995）
- 7) 吉田裕午：相対論における繰り込み概念、広島文教女子大学紀要31/、157-169（1996）
- 8) 吉田裕午：射影としての繰り込み概念、広島文教女子大学紀要32/、191-200（1997）
- 9) 吉田裕午：よみの繰り込み、広島文教女子大学紀要33/、143-153（1998）
- 10) 吉田裕午：過渡現象の繰り込み、広島文教女子大学紀要34/、11-23（1999）
- 11) 吉田裕午：記憶という繰り込み、広島文教女子大学紀要35/、103-112（2000）
- 12) 吉田裕午：相対論的繰り込み、広島文教女子大学紀要36/、53-62（2001）
- 13) 吉田裕午：咩字義繰り込み、広島文教女子大学紀要40/、45-54（2005）
- 14) 吉田裕午：エンタテインメント繰り込み、広島文教女子大学紀要41/、31-44（2006）
- 15) 吉田裕午：進化という繰り込み、広島文教女子大学紀要42/、15-24（2007）
- 16) 吉田裕午：次元繰り込み、広島文教女子大学紀要43/、41-52（2008）
- 17) 吉田裕午：相繰り込み、広島文教女子大学紀要44/、59-71（2009）

—平成24年11月 9 日 受理—